児童の発言を促す適切な発問の在り方について

高度学校教育実践専攻
教員養成特別コース　　実習責任教員　木下　光二
田﨑　玲美　　実習指導教員　川上　綾子

キーワード：発問　問い返し　発言　ねらい

Ⅰ　課題設定の動機

筆者は，児童が夢中になれる授業を目指している。基礎インターンシップでは，児童の考えを深める発問ができず，教師主体の授業となっていた。さらに，児童から筆者が思っている応答が返ってこなかった場合には，「今日は○○で考えてみよう」と児童の自由な思考を狭くするような発言をしていた。

このことから教師の不適切な発言をなくし，児童の深く考えた発言を引き出すには，適切な発問の視点からの授業改善が必要だと考えた。適切な発問とは，①児童が理解できるよう簡潔・明瞭であること，②授業内での活動のねらいに沿ったものであることとした。児童が授業に夢中になる授業展開に努めるため本課題を設定した。

Ⅱ　授業実践及び分析・考察

1　教職協働力実践演習Ⅰの授業実践

（1）　授業の概要

第５学年算数科「三角形の面積」の授業を行った。本時の目標を「四角形の面積の求め方から直角三角形の面積の求め方を導き出し，理解することができる」と設定した。本時では，自力解決する前に既習のである長方形の複雑な面積の求め，倍積変形と等積変形の復習を行うことで，直角三角形の面積の求め方に気付けるようにした。

（2）　成果と課題

模擬授業を通して見えた主な課題は以下のようにまとめられた。

①教師の説明が長く，喋り過ぎている。
②児童の発言をオウム返ししている。

今回，教師の喋り過ぎやオウム返しが原因で計画の時間内で授業ができなかった。また，児童の思考する場面や発言する場面が少なく，教師主導の授業となっていた。

2　基礎インターンシップの授業実践

（1）　授業の概要

Ａ小学校第５学年において，算数科の単元「分数（２）」（１/４）の授業実践を行った。本時の目標を「整数の除法の商は，分数を用いて表すことができる。」と設定し，2m のテープを３等分する活動を通して，（整数）÷（整数）は分数で表せることの理解を深められるよう授業を行った。

（2）　成果と課題

基礎インターンシップの授業実践において，導入の場面では児童の思考に合わない一方的な発言や教師の喋り過ぎがあった。そのため，指導案で計画した時間より導入に予定していた設定時間を大幅に過ぎてしまっていた。また，展開・まとめでは，教師にとって都合の良い回答のみを拾い上げ，その回答以外は認めることができない場面や児童が考えて発言するところを教師の方から発話してしまった場面が目立ち，教え込んでいる授業になってしまっていた。児童の考えを認められない原因として，筆者が計画した指導

案の道筋に固執していることが考えられた。さらに，喋り過ぎの原因は，教師の発問・発話が理解されているか不安になり，何度も確認してしまったからだと考える。

上記の課題を受けて総合インターンシップでは以下２つのことに取り組む。

①児童が理解しやすい発言の精選と発問の設定を考える。」

②児童の発言を受けて適切な問い返しや価値付けの言葉かけを行う。

授業づくりの段階では，児童の既習や経験と結びつける導入考えたり，細案を作成したりすることで，躓きやすい点や疑問点などを予想する。授業の中では，教科書に載っていない言葉や児童が使っていない言葉を教師側から使わないことや予想外の答えが出たとしても「どうしてそう思ったの？」と問い返し，発言を受け止められるようにする。また，適切な発問に関しては，発問のねらいを明確にすることを大切にしていきたい。

３　総合インターンシップ授業①　国語科「思いやりのデザイン」（２／２）の実践

（１）　授業の概要

Ｂ小学校第４学年において，国語科「思いやりのデザイン」の授業を行った。本時の目標を「段落相互の関係を捉え，筆者の考えに対する自分の考えをもつことができる」と設定した。実践では，筆者の考えを読み取る活動や段落相互の関係を考えることを通して，自分の考えを深められるよう授業を行った。

（２）　成果と課題

成果として２つ挙げる。

１つ目は，導入で本文に記載されている説明図を実際に見せることで本文中に書かれていることのイメージがしやすくなり，教材に対して関心を高めたことである。

２つ目は，児童の大半が筆者の考えに対する自分の考えをもつことができたことである。本時では，筆者の考えになる部分や話題提示の部分に線や丸をつける活動を行った。また，黒板にも本文を拡大したものを掲示し，児童のワークシートと対応するように線や丸を書いた。そのため，筆者の考えが明確になり，児童は自分の考えを書きやすくなったのではないかと考える。

一方，課題としては，児童の発言から学びを深める発問・問い返しができていないことである。今回細案で用意していた発問や児童の発言後に考えを引き出す問い返しができなかった。発問・問い返しができなかった原因は，授業の最初の方の活動に時間をかけ過ぎて，残りの活動の時間が少なくなってしまい，授業を早く進めようと焦っていたからだと考える。最初の方の活動で時間がかかった理由としては，教師と特定の児童との一問一答が多いことや教師が喋り過ぎていることが挙げられる。改善のために，教師自身が本時で児童に身に付けさせたい力を念頭に置いて授業を展開していくことが挙げられる。到達してほしい児童の姿を意識していれば，その到達の過程で不要な発言・発問は控えようとする意識が生まれるはずである。

４　総合インターンシップ授業②　算数科「がい数とその計算」（１／８）の実践

（１）　授業の概要

Ｂ小学校第４学年において，算数科「がい数とその計算」の授業を行った。本時の目標を「四捨五入による概数の表し方を理解することができる」と設定した。導入で学級の人数や小学校の児童数を問うクイズを行った

後，鳴門市の人口 55591 人を何万何千と言えるか数直線を用いて求め，概数の意味を理解した。展開では，２つの県の面積をそれぞれ概数で表した後，概数の表し方を話し合う活動を通して，切り捨て・切り上げと四捨五入の意味に気付くことができるようにした。

（２） 成果と課題

授業②における成果として２つ挙げる。

１つ目は，導入場面において子どもの興味・関心を引き出すことができたことである。人口当てクイズを掲示し，鳴門市にはどの位人がいるのか予想させることで児童たちは自然と口々に発言していた。

２つ目は，児童の表情を観察しながら問題を指名したり，授業を進めたりできたことである。基礎インターンシップでは，発問後すぐに手をあげた児童を指名したり，自分の授業を進めるのに精一杯で児童の表情をよく観察できなかったりした。今回は，挑戦しようとする児童の意志を表情から汲み取ることができ，発言を引き出すことができた。

一方，課題も２つある。

１つ目は，教師自身の感覚で発話し，児童に学習活動を押し付けるような発言をしてしまうことである。例えば，導入の場面では，鳴門市の人口 55591 人を何万何千人の概数にする際，「きり悪いよね」と発言して児童に同意を求めてしまっていた。概数の有用性に気付く学習を施していれば，教師の同意を求める発言は出てこないはずである。概数に限らず，算数の有用性を児童に伝えていくことができれば，授業に意欲的になり，児童の発言も増えたのではないかと考える。

２つ目は，児童の発言に対して教師が適切な問い返しが行えていないことである。本時で学ぶ内容をあれもこれも一様に押さえたいと思うあまり焦ってしまい，児童の思考を遮るような問い返しを行い，学級を混乱させてしまった。他の考え方との違いや共通点に迫る問い返しを行えていればもっと学びを深めたり，子どもが考えを表現したりする機会が増えたのではないかと考える。

5　総合インターンシップの成果と課題

（１） 成果

１つ目は，児童の興味・関心を引き出す導入を実践できたことである。授業①では，本文で記載されている説明図を実際に見せたり，授業②では，教師が身近な人数当てクイズを掲示し，どの位人がいるのか予想させたりすることで，子ども達の本時の学習における興味・関心を引き出すことができた。そのため，導入では児童たちの発言の回数が多かった。しかし，一方で，ただ児童の発言をそのまま肯定するだけになってしまっていたため，児童の日常生活と関連させるような発問ができなかった。「どこで見たことあるかな？」，「どこでそんな経験をしたの？」など，生活経験を想起させる発問ができれば，もっと児童の本時に迫る疑問やつぶやきが出てくるのではないかと考えた。

２つ目は，児童全員が参加できるような授業づくりが行えていたことである。今まで実践した授業では，手を挙げた児童のみ当てて発表する授業になってしまっていた。そのため，内容が分かる児童だけが付いていけるような授業展開であった。しかし，総合インターンシップでは，児童の表情を観察しながら，挙手していない児童でも指名したり，児童のつぶやきを拾ったりすることができた。

（２） 課題

１つ目は，場に応じて，児童の深い考えを

引き出すような発問・問い返しが行えていないことである。授業①では，教科書の本文に記載されてあることを一問一答で発問していたため，児童自身が考えた発言を引き出すことができなかった。授業②では，四捨五入をするための大切な事柄を焦点化する発問ができなかった。児童の思いや考えを引き出すために，ねらいを明確にしながら，教材や授業展開に応じた発問が必要であった。

２つ目は，抽象的過ぎて，児童がどのように発言すれば良いか分からない発問があることである。例えば，授業②では，２つの県の面積を提示した場面で教師が「島根県と栃木県の県の面積，これ２つどこが違うかな。」と発問した。その発問に対して，児童から返ってきた発言は「どこが違うってどういう意味？」であった。このように抽象的な発問になってしまう理由として，発問自体が自分本位になっていて，児童のことを考えられていないのではないかと考えた。さらに，教師の発問や発言には「あれ」，「これ」等の指示語が多く，具体的な内容で発話していないことがある。この具体性がない言葉遣いも発問を伝わりにくくしている原因である。

この課題を受けて，２つの改善策を挙げる。

１つ目は児童の表情や応答を意識して発問することである。自分本位の発問になるということは，教師の考えている内容が児童にも同じように伝わっていると思っていることである。児童の表情や応答から分からなそうな雰囲気を察知して，「もしかしたら，○○が分からないかな？」と気付けることが大切であると考える。そして，指示語を制限しながら，何について発問しているのか押さえた上で児童の思考の流れに沿った発問・問い返しを行っていくことが必要である。

２つ目は，伝える情報を省略しすぎないことである。今までの授業実践の課題の一つとして教師の喋り過ぎというものがあった。そのため，話し方や指示の仕方に気を遣っていたが，言葉を整理しようとし過ぎて，必要な情報まで省略していた可能性がある。児童にとって必要な情報を吟味し，具体性をもたせることが理解のしやすい発問につながる。

Ⅲ　今後の展望

本学に入学する前は，授業実践したとしても具体的に何が悪く，どのように改善すれば良いのか分からなかった。しかし，本学に入学してから，様々な実習を通して授業の指導案・細案を検討し，プロトコルを通じて分析した結果，課題を自覚することができた。

今後もねらいを明確にしながら発問を行い，理解しやすい発言の精選に努めていく。発問する際も自分本位で発言を予測するのではなく，児童の発達段階に応じた応答を予測することが大切である。そのためには，事前に児童の興味・関心や考え方の傾向を把握したり，児童の既習事項や内容を確認等したりして，発問を構想しておく。さらに，発問後には，机間指導を行って個々の児童の様子を観察し，先ほどの発問が伝わっているか声をかけることも必要になると考える。実践と改善を繰り返して試行錯誤しながら，児童の実態に即した適切な発問を実践していく。

理解しやすい発言の精選に関しては，自身で具体的な言葉で表現しようとする意識も大切だが，児童の表情を観察しながら対話していくことも同様に重要視していきたい。そして，改善を重ねながら一度の発言で児童に伝わるような適切な発問を行い，児童が夢中になれるような授業を目指していく。